仕立て方・せん定

大藤流仕立ての整枝せん定

１　要点

（１）目的

・早期収穫と肥沃土壌で強勢調節します。

・果実品質の安定を目指して仕立てます。

・多くの主枝候補枝を低い位置から車枝上に発生させ、牽制枝の活用と着果調節によって３～３．５ｍの低樹高に導きます。

・成木では３～４本の主枝となるが亜主枝は作らないようにします。

・弱せん定により、８０～９０％を短果枝で構成します。

・若木時代から品質の安定と多収を目指します。

（２）栽植密度

・１０ｍ×１０ｍ

※開園時は５×２．５ｍとし、計画的に縮間伐します。

２　仕立てとせん定

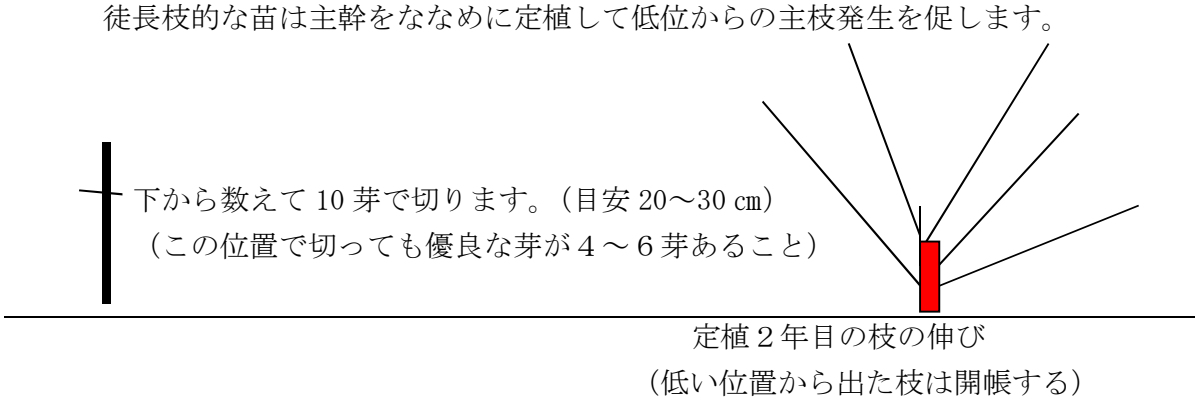
（１）苗木の選び方

・良い苗木

下部の芽が充実していて、根量があります。

１ｍ以下の通称２等苗と云われる苗の方が良い場合があります。

徒長枝的な苗は主幹をななめに定植して低位からの主枝発生を促します。



（２）若木の整枝せん定

①１年生～２年生

・低位置から５から６本新梢が発生するが、間引きは行いません。

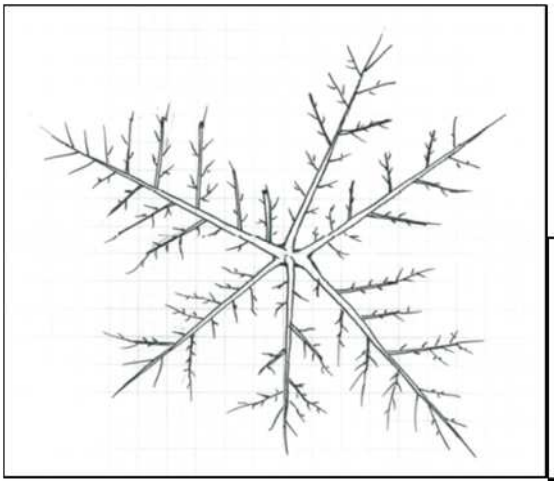
・枝の先端の先刈りはしないようにします。なお、枝が弱い場合のみ先端を軽くせん定します。

・せん定では内向枝や、副梢の上枝を切る程度とします。

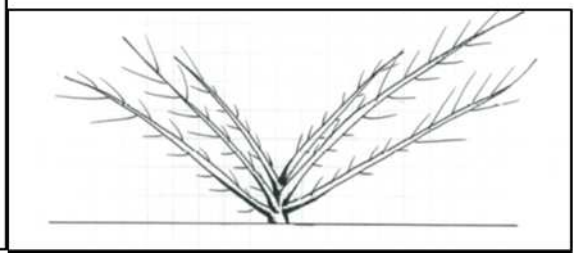
②３年生以降のせん定

・３から４年目頃より主枝を養成のため、主枝候補枝に邪魔になるような枝を段階的に間引いて行き、５～６年生頃を目途に３～４本にします。

・主枝候補枝以外の太枝を間引き場合は、「追出し」や「切り替えし」などで勢力と枝の太りを抑えて数年かけて行います。樹勢差を見ながら一度に切らないようにしましょう。
・短果枝主体の弱剪定とします。
・切戻しする場合は、結実して３年以降の枝色が鉛色で落着いた枝とします。
・背中からの上向きの枝は、混み合わない限り出来るだけ結果枝として利用します。但し、下枝など樹冠内部を暗くするような内向枝などは切除します。
・秋季せん定でも内部を暗くする徒長枝など整理しましょう。



≪大藤仕立て上図≫



≪大藤仕立て横図≫

③成木のせん定
・主枝は３から４本とし、亜主枝は作らないようにします。
・側枝などの間引きを控えて、結果部位の切り返しせん定を中心に行います。
・太枝から直接出た新梢は、せん定せずに側枝や結果枝の更新枝として利用します。
・主枝の元の枝が枯れ込まないように、樹冠内部は明るく保ちましょう。
・下垂した枝は、４～５年を目安に利用して先端の動きが悪くなってきたら切戻して活力を与えます。
・背中の枝でも、成らせる事を前提に配置して結果枝にします。結実させて、枝の調整を行います。

（３）留意点

大藤流仕立ては、大藤地区の肥沃な土壌での地の利を活かした仕立て方法であるため、土壌の条件や地力などを考慮して導入することが望ましいです。

・やせ地で大藤流仕立てを導入すると樹勢低下を招くため、導入する場合はあらかじめ十分な土作りを行う。
・慣行の仕立てから中途で大藤流仕立てに変えると、地上部と地下部の生育バランスが乱れるため樹勢低下を招きます。そのため、植えつけ当初から一貫した仕立てとしましょう。
・低い位置からの主枝を分岐させるため、樹冠下での大型機械の利用は困難です。
・短果枝主体の結果枝構成のため、初期生育や果実の初期肥大を促すよう、早くから摘蕾摘花を実施し、貯蔵養分の浪費を防止する必要があります。

・開心自然形と比べると摘蕾、摘花の作業時間が多くなるため、この時期の労働力を確保する必要があります。

≪冬せん定後３年生樹≫

≪その年の生育状況≫